

文化



平松 礼二・画

論 壇

1990

大 波 小 波

土地に関する基本データが、全くないんです。こんなことを政権党の責任者が、全国ネットのテレビでまがおで、おっしゃる国なんですね、わが日本は。結局のところ、その場しのぎで役人まかせで、軍備に金をつかわなかったおかげで、金あふれ物あふれになつてゐるんですよ。

日 本 語 教 育

政党というのが、まあ、じゃなかしらん。あつて無きがごとし、といふのは、基本の基本のデータが、四十年もないまま、やってこれた事ひとつでも、はつきりしてゐるじゃあ。また、外国人の少年労働者（たぶん日本語がでないうの）が事故死を起したユースが、流れた。外国人への日本語教育という必要欠くべからざる事業を、いったいどの省が責

とく糾弾したものである。この奥平康弘「憲法の転機としての『平和協力法』」を載せて、自衛隊生みの親の一人ともいわれる後藤田正晴・元内閣官房長官が「海外派兵」の暴論を排す（『月刊Asahi』十二月号）で強

中東貢献策をめぐる国会内外で議論が起こつた。たとき、佐藤誠三郎「いまこそ安全保障戦略を転換せよ」（『中央公論』十月号）は集団的自衛権は合憲だとの立場を強く唱へ、海部首相の

中東貢献策をめぐる

憲法論争を展開

中 嶋 嶺 雄



中堅の論客が
さわやかな論

過熱の割には
夢のあとの感

このような変動の核心をわが国の論壇はこの一年、果たしてとらえ得たのだろうか。湾岸危機に由来する国連平和協力法案や自衛隊海外派兵問題への賛否が派手な見出しで誌面に飛び交い、議論が過熱した割には、いずれも夢のあ

決断をしきりに促していた張り、護憲論の側からは、田中直毅「日本国憲法体制『選秋』（十一月十一号）。田中久保忠公論（十一月十一号）が一国平和主義ではない脱冷戦期の日本国憲法再確認を訴えていた。

右に見た論壇の亀裂は、かなり深刻であり、容易に交又し得ないが、そうしたなかで中谷蔵、中西輝政、北岡伸一、五百旗頭真、山内昌之、石川好、長谷川三千子らの中堅の論客が『Voice』、『季刊アステイオン』、『外交フォーラム』などでそれぞれがとつ（『Voice』三月号）、C・ジョンソン「対日政策の焦点はもはや安

六月号）などが国際経済全体を見渡したスケールの大きな議論を展開していたが、一連の石原慎太郎発言もあつて、当面、日米摩擦は癒えそうにないだろう。

講 和 條 約

戦後日米関係の起点



見 島 襄

国務相に就任した田中万逸氏

の権利である。講和使節も国民の意思で定めるのか。講和條約の意思で定めるのか。その手続きは国会の承認が必要か。講和會議では、日本は意思表示できるか。政府は、速かに講和關係諸問題にかんする基本的指導理念を確立すべきではないか。吉田首相は、答弁した。講和會議については、案外早